HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会科学の最後の出番
Author(s)	濱田, 康行
Citation	農林経済, 9868, 1-1
Issue Date	2007-06-04
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/22219
Rights	本稿は農林経済（時事通信社）に掲載され、同誌の許可を得て転載するものである。「農林経済　2007年6月4日　9868号」に該当する。
Type	column (author version)
Note	巻頭言
File Information	norin9868.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

社会科学の最後の出番

近代資本主義を通してみると、それは人類に大きなプレゼントをしてくれた。それは言うまでもなく物質的繁栄である。

近代資本主義の成功の最大の要因は、近代的経営と科学技術が首尾よく結びついたことだ。前者は利潤のために限りなく効率性を求める精神、後者は目的に突き進む冷徹な頭脳だ。

利潤を求める、これほど、わかり易い行動基準はない。事の成否は投下資本に対する利潤の割合（利潤率）ですぐわかる。勝負は誰の目にも明瞭で文句のつけようがない。科学技術も元来、一直線である。目的を設定すれば科学者はそれにどこまでも挑戦する。軽い材料はどこまでも軽く、薄い膜はどこまでも薄くだ。

このふたつの要素にはもともと歯止めがないから、その合成物である近代資本主義は内的にブレーキがかからない。時折止めるのは資本主義にとって外的なもの、つまり人々が以前から持っている慣習、道徳、文化そして宗教だったが、これらの要素は日本では欧米ほどに機能しなかった。特に戦後はそうであった。逆に言えば、だから日本は高度成長を達成できたのかもしれない。

しかし、この 20 世紀・西欧発祥の近代資本主義にも限界が見え始めた。利潤をとことん追い求める精神は富の偏在をもたらし、それは世界中の紛争の根源になっている。富の偏在を財政の機能で調整しようとする試みは国内でしか有効でない。利潤だけを追求する精神はこの問題を拡大こそするものの解決の手立てを持たない。

環境問題も同様だ。自然は長い間タダであった。そうではないとわかった時には手遅れだった。巨大な人口を持つ大国が次々とこのレースに参加してきた時、それを止める言葉を私達は失っていた。

科学技術は数々の発明をもたらし、そのお陰で私達は豊かになった。しかし、これもまた難しい問題を生み出した。効率の良いエネルギーを追求してついに核エネルギーに行き着いたが、これを制御できず核兵器をつくり、それを使用した。生命科学はついにクローン技術を生み出した。ヒトクローンは禁止されているが、それは“できない”を意味しない。私達は絶滅の兵器（神の火）とヒトがヒトを生み出す技術（神の技）を同時に持っている。

経営の精神も科学の頭脳も自らが生み出したものを処理できない。そのものが極めて危険なら、それこそ私達は死に至る病に冒されていることになる。

20 世紀型から脱却して新しいシステムを求めなければならない。資本主義をうまくやり直す、分権的な社会主義を構想する、協同組合主義はどうか、農業重視の自然回帰も考えられる。家族・コミュニティ中心の社会はつくれないか。人類を救うなどといえば、この一世紀の間、活躍の場のなかった社会科学者はテレてしまいそうだが、いよいよ出番だ。最後の幕が上がる。神の声が聞こえる、“おのおの方、用意はよろしいか”。